歴史文化基本構想ワークショップ

瀬戸の魅力再発見　まちめぐり　Ｐａｒｔ 10
幡山地区（本地）

瀬戸市交流活力部文化課

平成２８年８月７日 (日)

①本地大塚古墳→②駒前１号墳→③長久手合戦笠松伝承地→
④本地城跡→⑤本地八幡社

① 本地大塚古墳（市指定）(6 世紀初)

本地大塚古墳は、市域の南西部の矢田川左岸に形成された沖積地上に立地する、市内で唯一の前方後円墳です。南側には標高 100 m前後の丘陵が舌状に張り出しており、その北端には本古墳を見下ろすように、駒前 1 号墳が造営されていました。

本地大塚古墳は、現況で確認できる墳丘の全長が 30.8m で、東西方向に主軸をもち、東側に後円部が造られています。この部分はかつて開墾によって上部が削られたため、本来の墳丘は現在の姿よりも高かったようです。また、前方部は後円部に対し、短く張り出す形状から「帆立貝式」とも呼ばれる形態となります。

本古墳については、今から 50 年前の昭和 40 年と 41 年に発掘調査が実施されています。その後、調査に関する記録類が焼失してしまったため、詳細は不明のままでしたが、保管されていた出土遺物から埴輪を伴う古墳であることが明らかになっています。埴輪には、円筒形埴輪と呼ばれる筒状のものや、鳥や武人などを模した形象埴輪と呼ばれるものがみられます。

また、平成 27 年には幡山西保育園建替工事に伴い、墳丘の北側を対象に 2 次にわたって発掘調査が行われ、古墳に伴う周溝の一部が検出されました。周溝の存在はこれまでも予想はされていましたが、この調査によって、墳丘を取り巻く溝が二重に巡らされていたことなど、本古墳の構造を明らかにする貴重な成果を上げることができました。なお、内側の周溝は、墳丘の裾付近から掘り窪められた幅の広いもので、内側の周溝を含めた本古墳の規模は、全長約 50 m、幅は約 40 mと推定されます。一方外側の周溝は、内側の周溝に沿って、幅 7.5 ～ 8 mで巡っています。

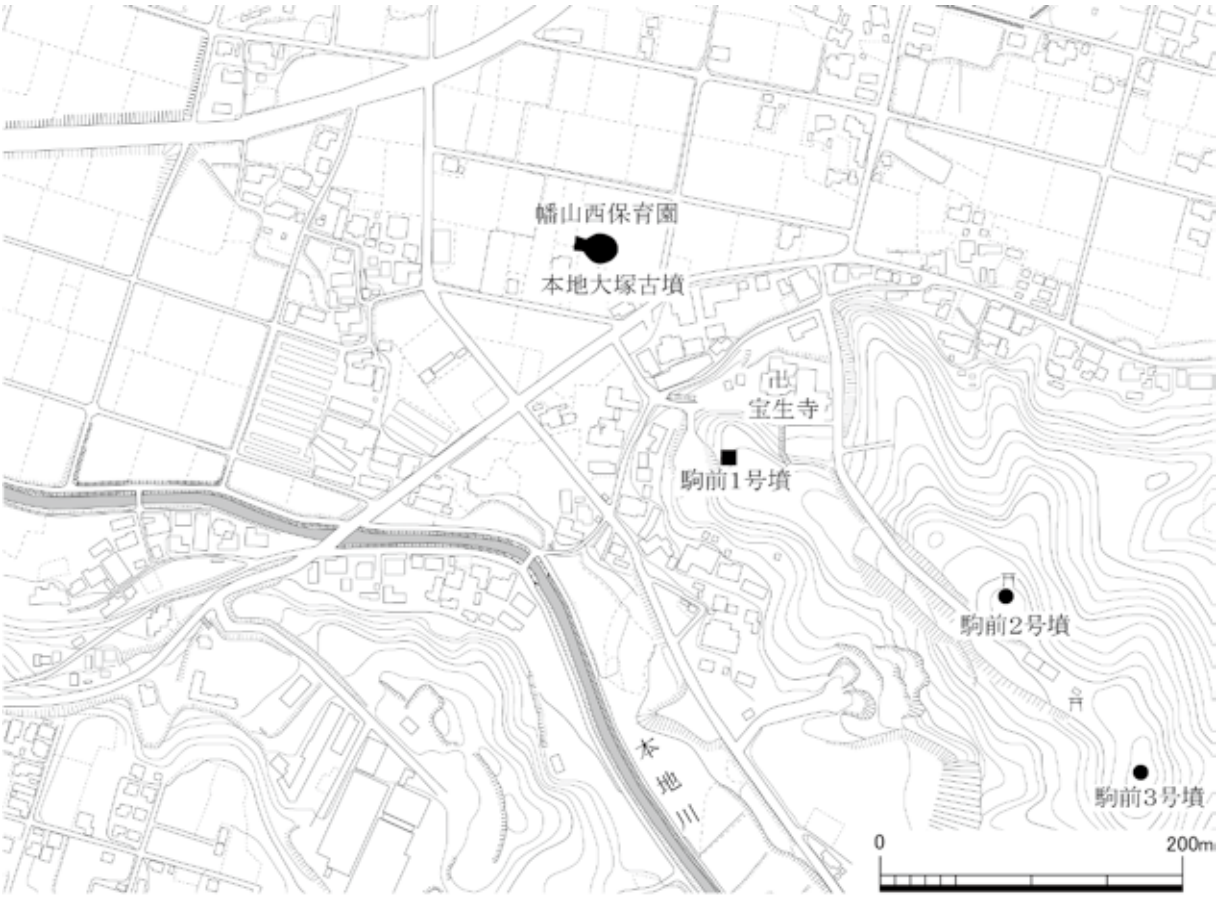
写真 1　本地大塚古墳全景

写真 2　平成 27 年度調査区（北区）

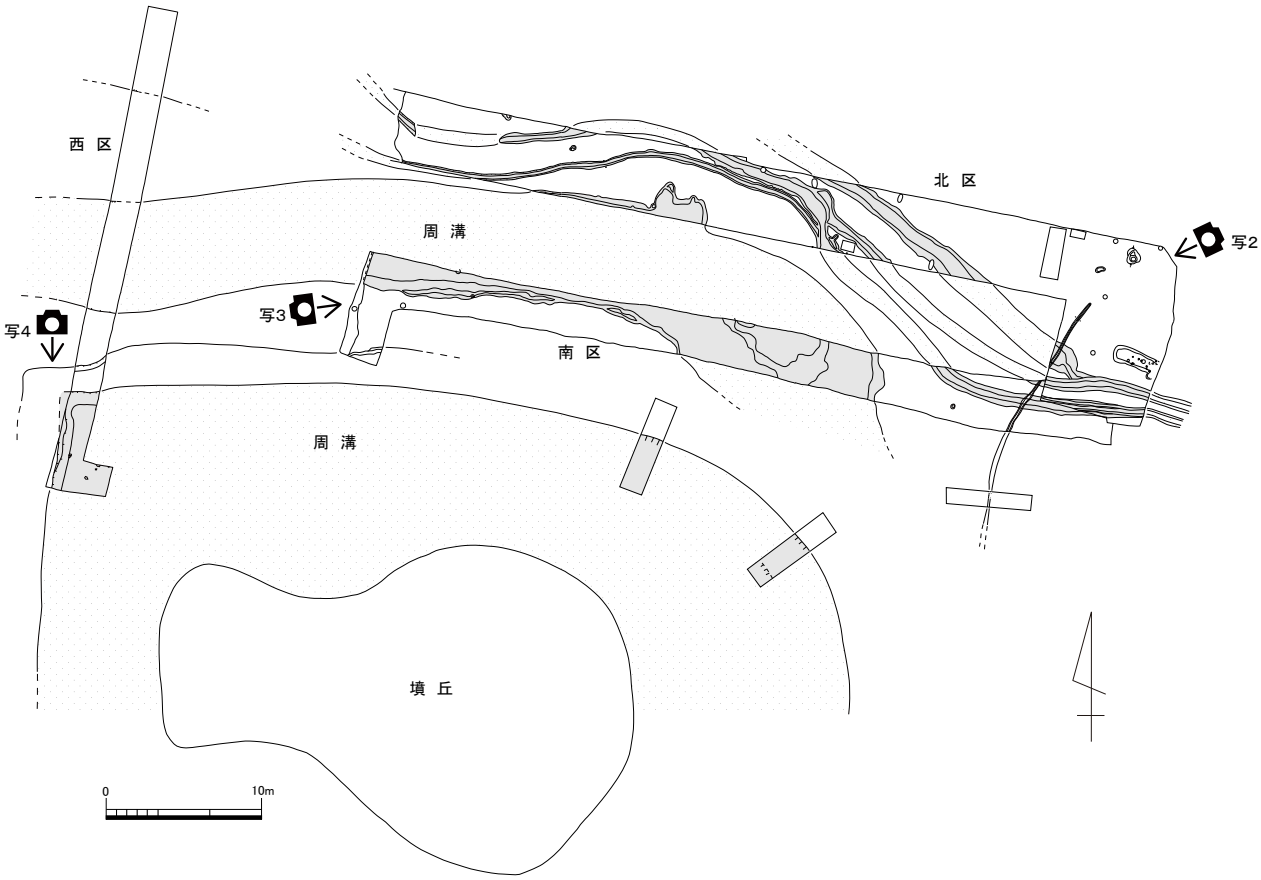
写真 3　周溝検出状況 1

写真 4　周溝検出状況 2

周溝の中からは埴輪や須恵器などが多量に出土しています。今後、調査で作成した図面と出土した遺物の検証作業を行い、詳細は発掘調査報告書に掲載しますが、本古墳の造られた時期は、6 世紀初め頃と考えられています。



本地大塚古墳周辺地形図



本地大塚古墳周溝実測図

② 駒前（こままえ）1 号墳 (5 世紀末)

駒前 1 号墳は、本地大塚古墳の南側、標高約 90mの丘陵先端部に構築されていました。平成 8 年に発掘調査が行われ、尾張東部では珍しい、一辺が約 14mの方墳と、それに伴う主体部が 1 基検出され、さらに古墳を取り巻くように円筒埴輪が巡らされている状況が確認できました。被葬者を埋葬した主体部は竪穴構造ですが、上部はすでに削平され流失していました。遺された床面は長さ 3.8 m、幅 1.5mの長方形で、直上には炭化物や、さらに拳大の円礫が敷き詰められていました。棺は確認できませんでしたが、おそらく木製のものが使用されていたと考えられ、その棺の周囲を覆うように粘土が配されていました。主体部からは、副葬品と思われる鉄刀 2 点、鉄斧 1 点、鉄鏃数十点、刀子 3 点の他、木簡に使用されたと思われる金具類 5 点が出土しています。

この他の出土遺物には、須恵器や土師器、そして様々な形をした埴輪がみられました。

須恵器や土師器は、いわゆる被葬者に対しての供献品としての性格があったと思われます。古墳の西辺部と南辺部で確認され、その時期は前者が 5 世紀末、後者が 6 世紀前葉で時期差がみられました。おそらく、この 2 つの時期にそれぞれの場所で墓前祭祀が行われたと考えられますが、いずれにしても本古墳が築造されたのは、少なくとも 5 世紀末まで遡ることが明らかになりました。

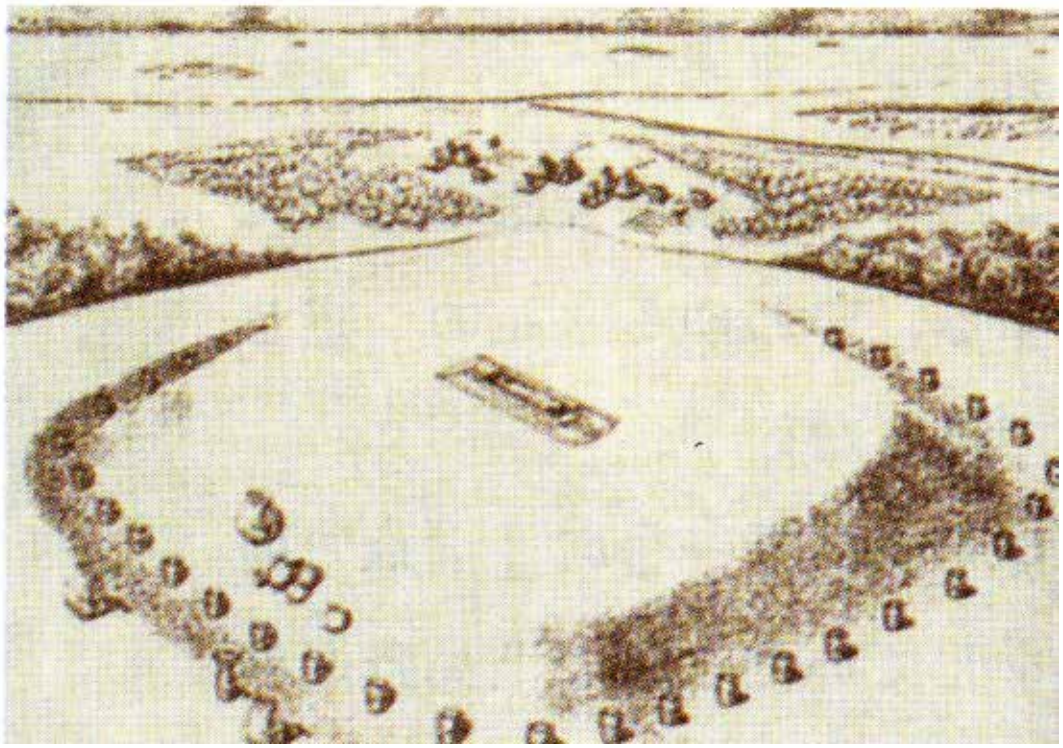
埴輪は周囲に巡らされた円筒埴輪の他に、家形埴輪や朝顔形埴輪が出土しています。

写真 1　駒前 1 号墳全景

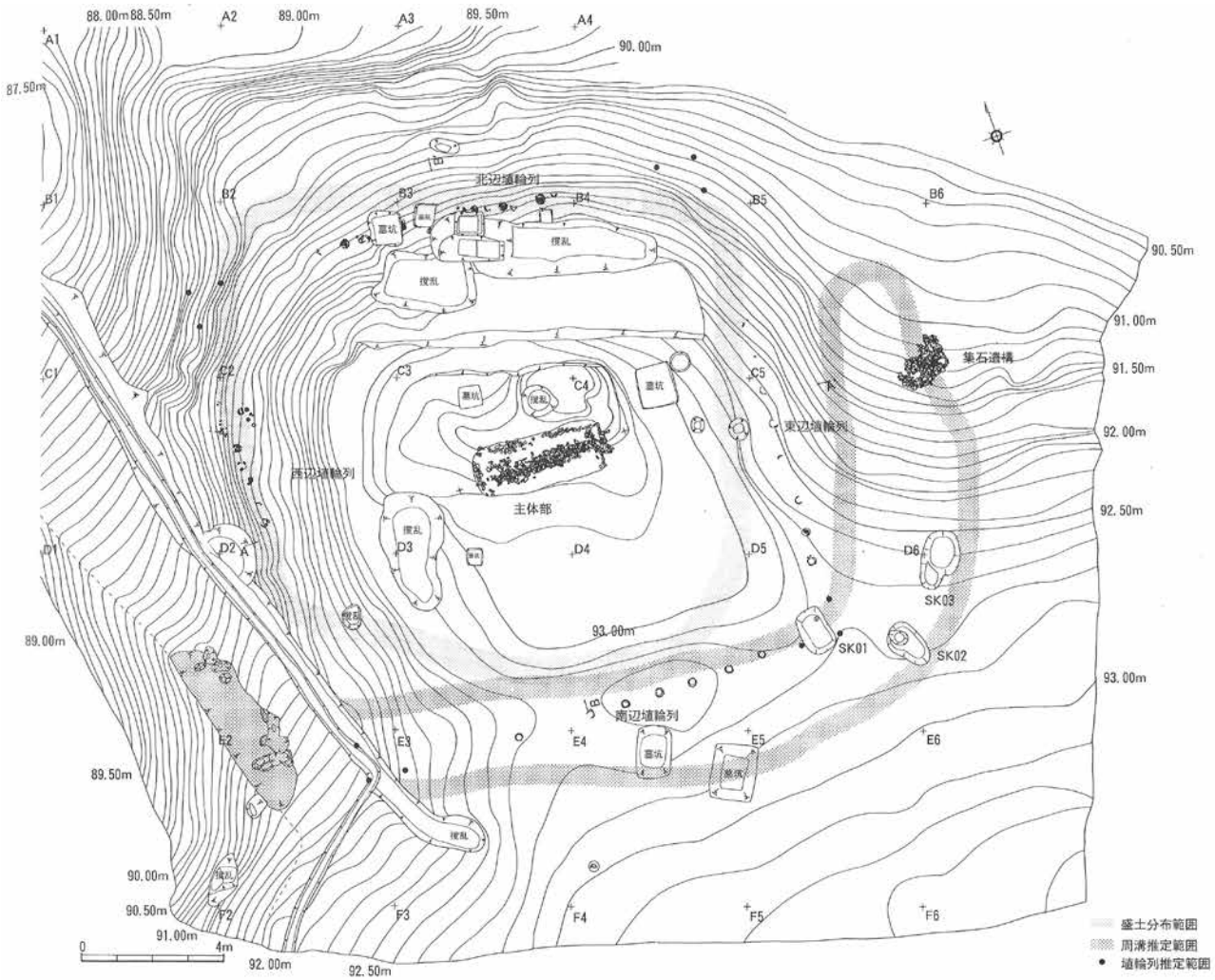
写真 2　主体部検出状況

写真 3　円筒埴輪出土状況

写真 4　家形埴輪



駒前１号墳復元図



駒前１号墳遺構配置図

③ 長久手合戦笠松（かさまつ）伝承地（天正 12(1584) 年）

宝生寺裏の丘陵尾根の小高く突き出た部分に御嶽山があり、その小堂や石碑群の南西側に 1 本の松が植えられています。この松に関しては、小牧・長久手の戦い (天正 12(1584) 年) の際に、徳川家康がここに立ち寄り、被っていた陣傘をその枝に掛け、兜に付け替えて合戦のに臨んだとする故事にちなんで「笠松」と呼ばれているものです。残念ながら、実際の松は戦後まもなく枯れてしまい、現在は 3 代目の若い松が故地に植えられています。

小牧・長久手の戦いのはじまり

天正 10(1582) 年の本能寺の変以降羽柴秀吉が頭角を現す中、織田信長次男の織田信雄との確執が顕著となり、同 12(1584) 年 3 月 6 日に信雄は秀吉に通じた三家老を処刑したことを端緒に、秀吉との対決は決定的となります。信雄は家康に援軍を求め、秀吉との戦闘状態に入ります。

織田信雄・徳川家康連合軍は、清須城から小牧山城へ、羽柴秀吉方は大垣城の池田恒興が犬山城へ侵攻し、秀吉本隊とともに 3 月下旬には楽田城まで軍を進めます。

長久手合戦へ

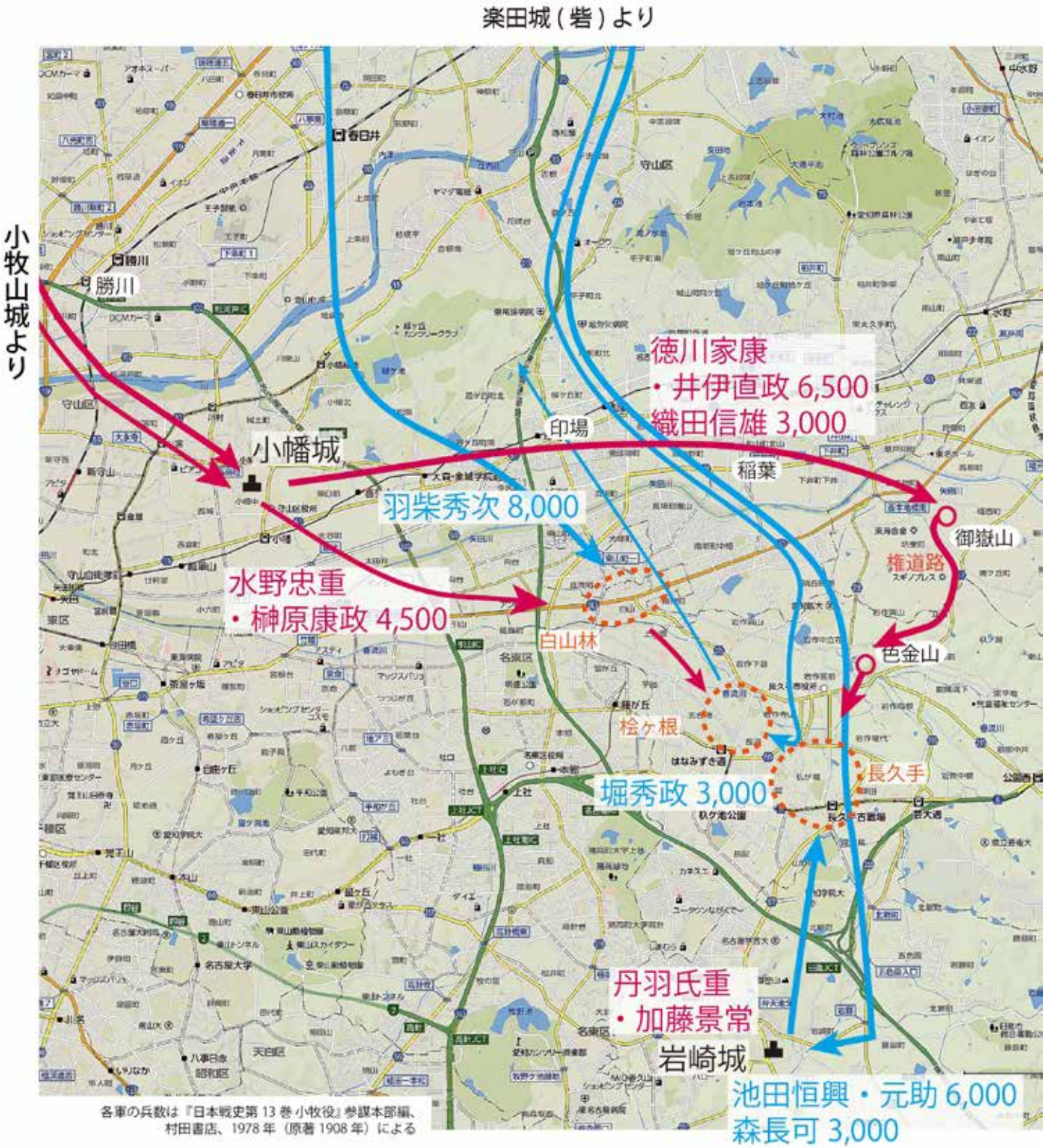
このような中、池田恒興は、別動隊で三河の岡崎城を攻める事を提案し、4 月 6 日に楽田城を出陣します。池田軍が現春日井市の篠木を通過する状況は、つぶさに徳川家康に伝えられ、4 月 8 日には織田・徳川軍の大半は小幡城へ移動します。秀吉軍の別動隊である池田恒興・森長可・堀秀政・羽柴秀次は総勢 2 万の兵でしたが、軍勢が大きく、4 月 9 日早朝最後尾の羽柴秀次が白山林で休憩していたところ、徳川軍の先鋒隊である水野忠重ら 4,500 の兵が急襲して 8,000 の兵の秀次軍を壊滅します。さらにはその南前方にいた堀秀政と桧ヶ根で合戦となり、秀政は榊原康政に勝利しますが、家康軍が迫っていたため北方へ退却します。

徳川軍 本地を経由して色金山へ

小幡城で軍議を行った徳川家康は、本隊を東に大きく回り込んで進めることとし、印場・稲葉を通過し本地の御嶽山へ軍を進めます。池田恒興らの通過ルートからすれば、水野らの先鋒隊と背後から少しずつ挟み撃ちにしていく作戦と考えられます。地元に伝えられるところによれば、ここまで陣笠を被っていた家康がいよいよ戦闘体制に入るにあたり、兜に付け替えたといわれます。御嶽山は、南西方を見渡すことができ、戦況を把握できる好所でありますが、織田・徳川軍本隊は暇なく夜明け前に南方の権路山・色金山へ向け進軍します。この徳川家康（東照権現）の通過した道ということで、後年山の田付近の道を「権道路」とも呼ばれるようになったということです。

長久手合戦の結末

4 月 9 日早朝には、池田恒興・池田元助・森長可が、城主丹羽氏次の弟の氏重と加藤景常らの守る岩崎城 (現日進市) を攻め落しましたが、織田・徳川軍の到来を知り、北へ退却をはじめます。そして、長久手で徳川家康本隊と合戦となり、結果池田恒興・元助親子、森長可が戦死することとなりました。その後、織田・徳川軍は、羽柴秀吉軍本隊が到着前に小牧山城へ帰還しています。



長久手の戦い（天正 12(1584) 年 4 月 6 ～ 9 日）隊制図

④ 本地城跡（室町・戦国期）

寛文年間(1670年頃)に成立した『寛文村々覚書』には、「先年松原平内居城之由、今ハ畑ニ成ル」と記され、天保14(1843)年に成立した『尾張志』には「本地村植田島といふ地にあり 民家八九戸ありて其外は田畠也 東北二方に堀の址いささか存れり 民居入交りて四至詳(つまびらか)にわきまえがたけれどよくよく見あきらむに東西三十五間(63ｍ)はかり南北廿四間(43ｍ)計あり 城主は松原平内也と府志に見えたる如し いにし頃迄城址に松原氏の者ありしが坂上島という地に家を移せり」と記載されています。

本地城の遺構について

城跡の正確な位置は不明ですが、『尾張志』の記載にあるように、江戸後期までは北と東を区切る堀跡が残っていたようです。平成24年に個人住宅建設工事に伴う立会調査では、北辺の堀跡と思われる溝の一部が検出され、戦国期の遺物も一部出土しています。

本地城主について

昭和41年刊行の『日本城郭全集』中で戸田修二氏は「本地城主は、今村城主松原吉之丞(きちのじょう)の弟で、吉之丞の子下総守広長の叔父にあたる人であろう」としており、文明14(1482)年の安戸坂の合戦で広長とともに討死したと地元で伝えられていると記載されています。なお、地元の松原氏末裔の家には、松原平内は広長の弟であるとする言い伝えもあります。

底抜け柄杓の伝説

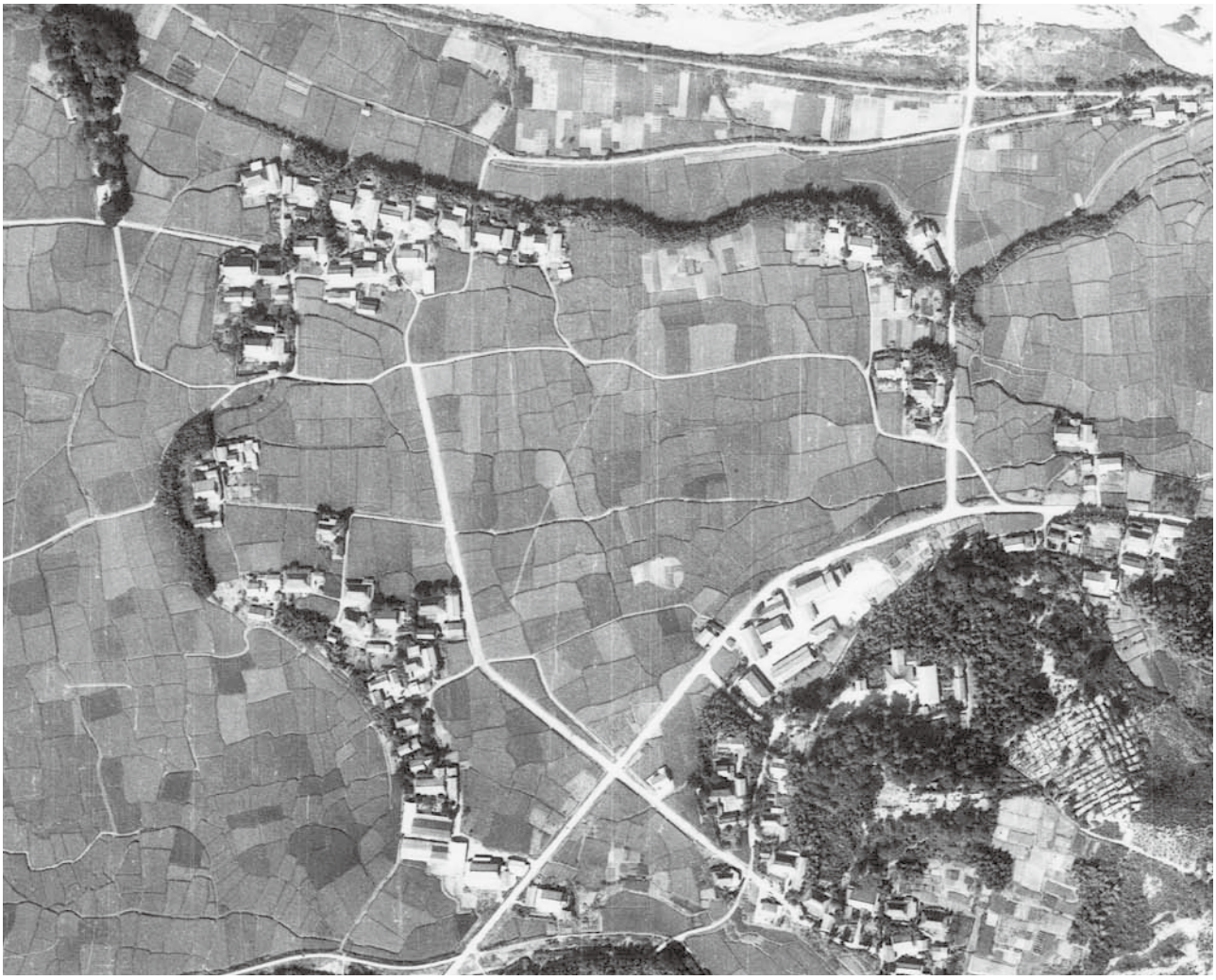
本地地区に残る本地城跡に関する伝説があります。かつて、松原平内が本地城に在城していた頃、信州方面からの150人余りの浪人が本地城を攻めようと狩宿村(現尾張旭市)に集合しようとしていたところ、狩宿の領民はつるべ・柄杓・桶などの底板をすべて打ち抜いて使い物にならないようにして、逃散(山などに逃げる)したため、浪人たちは本地の中切に屯しました。そこで松原平内は、領民と協力して朝食時の浪人たちに斬り込み、これらを撃退したというものです。

この底抜け柄杓の伝説は、猿投神社祭礼の際に本地の飾り馬につける標具にも反映され、網を地とした高札(ハンゲ)の両脇に、底抜け柄杓を取り付ける形となって今日まで伝えられています。

本地城跡標柱と津島社

本地城堀跡？出土遺物(平成24年)

本地城跡周辺地形図 (S=1/1,250)



本地地区中心部航空測量写真（昭和 32 年）

⑤ 本地八幡社（文治元(1185)年創建　棟札:寛延元(1748)年～）

文治元(1185)年に大分の宇佐八幡宮の分社として創建されたとされる本地八幡社は、本地村の氏神です。創建当初の文物は残されていませんが、今日まで遺されている棟札には寛延元(1748)年の本殿建造のものが最古で、寛政5(1792)年の村絵図にも現在の位置に八幡社が描かれており、江戸中期には現在の位置に所在していたようです。

秋季の例大祭には、標具を付けた飾り

本地の標具（平成25年郷社祭り）

本地の警固祭り（平成23年）

本地の警固祭り（鉄砲隊）（平成23年）

本地の警固祭り（棒の手（起倒流））（平成23年）

本地八幡社の秋季例大祭（神楽）（平成23年）

本地八幡社の秋季例大祭（神楽御囃子）（平成23年）

馬１頭を伴った警固祭りが行われ、棒の手や鉄砲隊とともに地域をまわり、神楽等とともに八幡社へ奉納されます。

幔幕 (本地村東原山嶋)(明治 13(1880) 年) 縦 1.87 m残存幅 5.88m「船弁慶」か

幔幕 (本地村坂上嶋)(明治 28(1895) 年) 縦 3.38 m幅 12.42m「船弁慶」か

幔幕 (本地村中嶋)(慶応 3(1867) 年) 縦 2.65 m幅 11.3m「賤ヶ岳の戦い」か

八幡社参道に並ぶ黄葉・赤葉のケヤキ (東から)(平成９年以前)

平成 23 年の落雷で
大規模に枝打ちしたケヤキ

本地八幡社のケヤキ (瀬戸の名木№ 41)

ま　ち　め　ぐ　り　Part10
幡山（本地）コース（予定）